

## 跋

私の勉強部屋に二つの額が懸けてある。ひとつは修士の学位記であり、ひとつは博士課程単位取得証書である。子どもらしい戯たむげと笑われるかもしれないが、私にとって関西大学大学院の五年間は、ことばにはあらわれないほどの充実感にあふれた時期であったのである。

昭和四十年四月に、飯田正一先生のお骨折りで大学院に入学し、先生の暖かいご配慮をいただきながら、存分に学問の楽しさを味わうことができた。学舎の赤煉瓦は私にとって関大の象徴として今も心に深く刻みこまれている。

博士課程の指導教授は金子又兵衛先生であった。先生の該博な知識を駆使されてのご講義のすべては、私の新しい知識として蓄積されていった。その博士課程在学中の一時期、関大は学園紛争の渦中にあった。研究棟を封鎖され、講義室を奪われて、ある時は講師控室で、ある時は大学院ホールに他学科の講義と隣合わせに、小島吉雄先生の近代短歌史のご講義を拝聴したあのなつかしい思い出は、忘れることはできない。

かく、私を魅了したものは何だったのだろうか。晩学のせいだったのだろうか。それとも、過去の私の大学生活が必ずしも順調でなかったせいだったのだろうか。

そんな中で、この総索引作成の仕事が始められたのである。

博士課程三年目の春、田中重太郎先生のお勧めであった。その目的は金子先生のご序文にも、そして田中先生のご序文にも、いみじくも語っていただいている。それからの二か年、田中先生の魅力あふれるご指導と励ましは、私を挫けさせることはなかった。しかし、私の学力不足と、高校定時制勤務からくる時間不足は如何ともし

がたく、主として学力不足からくるものだが、当初、一か年の予定で始めたこの仕事もついに二倍の月日を費やしてしまい、田中先生に長くご迷惑をおかけする結果となってしまった。深くおわび申し上げる次第である。ともかくも、この書の完成は、多くの方々のご援助によるものである。

今までに、私のお仕えたPL学園長、原田種臣、橋本春生、橋口勝、三先生のお取り計らいと、教頭土井倍先生、定時制主事高島嘉勝先生はじめ同僚の方々の理解がなかったら、大学院で学ぶことはもちろん出来なかったし、従って、この書の刊行もなかったであろう。深くお礼申し上げます。

また、結婚以来、購書癖と古書漁りに家庭をかえりみることもなかった私を支えた妻の理解はありがたかった。

ご序文をいただいた金子先生と奥様には公私ともたいへんお世話になった。衷心より感謝申し上げます。

また、非力の私に敢えて、総索引の作成を勧められ、出版のお世話までいただいた田中先生のご高恩は、終生忘れることはできない。

過日、田中先生の歌文集「真実」に心打たれ、今度また、金子先生の句集「歌日記」は私の心を深くとらえた。このお二人の先生から身に余るご序文をいただけたことは、私の最高の幸せとするところである。

なお、この索引作成にあたっては、岩城之徳先生の「近代文学注釈大系 石川啄木」に負うところ多く、深く感謝申し上げます。また、両歌集初版復刻の縦覧は、勤務校図書館の好意によるものである。

最後に、拙稿の出版を快くお引き受けくださった笠間書院社長池田猛雄氏のご好意に心からお礼申し上げます次第である。あたかも、今年は、父の十年忌、母の二十年忌にあたる。感慨一入である。

昭和四十七年九月二十九日

村上悦也